

銭形平次捕物控

駕籠の行方

野村胡堂

青空文庫

一

ガラツハの八五郎はぼんやり日本橋の上に立つておりました。

御用は大暇、懷中は空っぽ、十手を突つ張らかしてパイーにあり付くほどの悪気はなく、このあいだ痛めたばかりの銭形の親分のところへ行つて、少し借りるほどの胆きもも据すわりません。

夕映えの空にくつきりと浮いた富士を眺めながら、歌にも俳諧はいにも縁の遠い思案をしていると、往来の人はジロジロ顔を見て通ります。どう面喰らつても、身投げと間違える氣遣いはありませんが、その代り、夕景の忙しい往来の邪魔になることは請合

いす。

「おや？」

ガラツハはガン首をあげました。自分の足許に南なんりよう鐐りょうが一枚チャリンと小さい音を立てて躍ったと思うと、眼の前をスレスレに、一挺の駕籠かごが通ります。

ガラツハはそいつを拾つて、無意識に駕籠を追いました。間違ひもなく南鐐は、駕籠の中から落ちたものだったのです。

「ちよいと、若い衆——」

ガラツハはそう言いかけた声を吞みました。

駕籠を追うともなく橋を渡つて南へ、高札場の前へ来ると、またも駕籠から、チャリンと一枚。

「おッ」

拾つて見ると、こんどは小判が一枚。

この山吹色の小判が、駕籠を担いだ後棒の注意も惹かず、織るような往来の人の眼にも触れず、二三間後から追つかけた、ガラツ八の手に拾われたのは、全く奇蹟に近い偶然でした。

いや、偶然ではなくて、それは後ろから跟けて来るガラツ八を目的に、わざと拾わせる心算で落したのかもわかりません。

しかし小判一枚となると、八五郎ならずともそれは大金です。夕陽にキラリとするのを指につまんで高々と宙に振りながら、ガラツ八は思わず駕籠の後を追いました。当然それは深々と垂れをおろした駕籠の中の客に返さるべきものだったのです。

「待ってくれ——その駕籠待ってくれ」

あわてて駆け出したガラツ八の足許へ、その軽率をとがめるように、カバリと落ちたのは、その頃の下町娘が好んで簪さした、つまみ細工ざいくの美しい櫛くしではありませんか。

「……………」

ガラツ八は完全に封じられてしまいました。駕籠の中からは、明らかに、ガラツ八の注意を促すために手当り次第に物を捨てているのでしょう。そうでもなければ、南鐐と小判と飾り櫛は、いかにも取合せが変てこです。

中橋から南伝馬町へ来ると、四文銭が一枚、コロコロと転がり落ちました。駕籠の中の客も、少し懷ろが怪しくなったのかと思

うと、京橋を渡ったところで落したのは、二分金が一枚。

駕籠はそんなことに構わず、夕暮近い江戸の町をヒタヒタと急いで、芝口から宇田川町へ、浜松町へとさしかかります。

人足は次第に疎^{まば}らになって、八五郎もあまり駕籠の側へは寄るわけに行きませんが、中から落す品は青銭になり、小粒になり、簪^{かんざし}になり、五丁に一つ、三丁に一つの割合で絶えず八五郎の注意を惹き付けるのでした。

金杉を渡って、芝、田町へ差し掛ると、懷中鏡が一つ抛^{ほう}り出されたのを最後に、駕籠はピタリと停^{とま}りました。が、駕籠の側に付いていた若い男が、何やら駕籠屋に耳打ちをすると、そのまま駕籠をあげて銀鼠^{ぎんねずいろ}色の夕靄^{ゆうもや}に包まれた暮の街を、ヒタヒタと急

ぎます。その頃から八五郎の追跡も一段と熱を加えて、もうすきつ腹も、疲れも忘れておりました。

たかなわ
高輪

北町へ差し掛った頃は、すっかり暗くなりました。が、駕籠は灯も入れず、ただひたむきに急ぐばかりです。往来が暗くなつたせいか、駕籠からはもう何にも落ちません。

「あッ、野郎ッ、挨拶をしろ。いきなり人に突き当つて」

それは全く不意でした。東禅寺とうぜんじ門前あたりから飛び出した遊

び人風の男が一人、一生懸命に先を急ぐ八五郎にドカンと突き当たると、いきなり火のつくような剣突きを喰わせるのです。

「勘弁しねエ、過ちはお互だ」

八五郎は軽くあしらって一步踏み出しました。

「何をツ、過ちはお互だツ？ そつちから突き当つて、よくもそんなことを言やがる。これでも喰らえツ」

パンパンパンと、ガラッ八の頬は鳴りました。小気味の良いほど手の早い男です。

「野郎、^{なぐ}撲つたなツ」

モタモタと^{つか}掴みかかる八五郎。

「撲つたがどうした、^{とうへんぼくめ}唐変木奴ツ」

つづいてまた四つ五つ、パンパンパンと打ってくる腕を^{から}辛くも引つ掴んで、ガラッ八得意の力業になりました。

「畜生ツ、こうしてくれよう」

相手はしかし恐ろしい早業でした。八五郎の胸倉を掴んで往来

に引っくり返ると、仰向きになりながら手と足とを働かせて動モーションきの遅い八五郎を滅茶滅茶に悩ませます。

「えッ、うるさい野郎だッ。——これが見えないか。御用だぞッ」
 持て余し抜いた八五郎は、とうとう懷ろから十手を取り出して、
 この厄介な挑戦者に見せる他はなかったのです。

「あッ、そいつはいけねエ」

相手はいっぺんに兜かぶとを脱ぎました。十手を見ると一も二もありません。八五郎の胸倉を離すと一足飛びに、どこともなく姿を隠してしまつたのです。

「何という野郎だ。忌いまいま々しい」

八五郎は大舌打ちを二つ三つ、埃ほこりを払つて駕籠を追いましたが、

その時はもう肝腎かんじんの駕籠はどこへ行つたかわかりません。

あきらめ兼ねた八五郎は、それでも追つ手をゆるめず、品川へ入つて、歩行かち新宿から南本宿まで飛びましたが、見覚えの駕籠は影も形もなく、犇ひしひし々と身に迫るのは、噛み付くような空腹感です。

二

「親分、これ何と判じたものでしょう？」

ガラツ八の八五郎は銭形平次の前へ、前夜日本橋から芝、田町までの間に拾つた南鐐なんりょう、小判、飾りかざり櫛くし、四文銭、二分金かんざし、簪、

懷中鏡——と畳の上へ並べて行つたのです。

「何だえ、それは？」

平次もツイ起き上がりました。縁側に腹^{はら}ん這^ばいになつて、蟻^{あり}の作業を眺めながら、煙草をすつているところへ、いきなりガラツ八がこの判じ物を持込んで来たのでした。

「あつしには分りませんよ、親分」

「どこで拾つて来たんだ。——まさか淡島様のお堂を搔き廻したんじやあるまいな」

「そんなタチの悪いことはしませんよ。こいつは日本橋から高輪の方へ行つた駕籠の客が落したんで」

「フーム、面白そうだな。詳^{くわ}しく話してみな」

平次も乗気になりました。四文銭と小判に挟まれてつまみ細工の櫛や、平打の銀簪や、その頃の世界では、この上もない贅沢ぜいたくだつたギヤマンの懷中鏡が、妙に感傷をそそります。

「こういうわけですよ、親分」

ガラツ八は昨夜の経験をこまごまと語りました。喰い付くような熱心さでそれを聴き入る平次。

「それからどうした」

「仕方がないから、品川からトボトボと歩いて帰りましたよ。親分の前めえだが、江戸は広いね」

「何をつまらねエ」

「だって、家へたどり着いたのは、亥刻よつ（十時）近い刻限でしょ

う。気が付いてみると昼から何にも喰わなかったんで、いや腹が減ったの減らないの——」

ガラツ八は頬を凹^{へこ}まして見せるのでした。

「相変らず一文無しか」

「お察しの通りで、——帰ったら親分に借りて返すとして、拾った南鐐で、夜鳴き蕎^{そば}麦の暴れ喰いでもしようかと思つたが、——怖い顔なんかしちやいけません。そいつは思い止まりましたよ。

——南鐐の面は大概同じだし、二朱に通用することに変わりはないが、拾った金で腹を拵^{こぎ}えちや、懷中の十手に済まねエ」

「呆^{あき}れた野郎だ。一文無しで江戸の街を歩く御用聞があるものか。

——いつ、どこへ飛ばなきやならないか分らないじゃないか」

「相済みません」

ガラツハはピヨコリとお辞儀をしました。

「しかし、そいつはとんだ面白い話になりそうだ。——駕籠が停つたのは芝、田町に間違いあるまいな」

「田町四丁目、辻番の手前で、——あすこの大福は大きくてうまい」

「馬鹿だなア。——それから変な野郎が喧嘩けんかを吹っつけたのは東と禅寺ぜんじ前」

「高輪中町で、——あの辺には洒落しゃれた掛け茶屋がある」

「そこで長いあいだ揉もみ合つたのか」

「なアに、ほんの煙草一服の間でさ。——ポンポンポンといきな

り四つ五つ引つ叩ばたいて、引つ組んで転がつて——」

ガラツ八は仕方話になりました。

「起き上がって見ると駕籠がいなかったんだね。それとも暗くて見えなかったのか」

「あの辺は海沿いの一本道でさ。日が暮れたって、一丁や半丁のみとお見透しがききますよ」

「横道へ入ったのかな」

「そんなことかも知れません。——とにかく、向うから来る駕籠はあったが、こっちから行くのは一つもなかったんで——」

「ちよいと待ってくれ。その向うから来る駕籠というのは、東禅寺前で逢ったのか」

「さんざん揉み合つた野郎が逃げたんで、立ち上がつて改めて駕籠を追っかけると、ちようど品川の方から逆に町駕籠が一挺飛んで来ましたよ」

「馬鹿野郎ッ」

「へエ——」

不意の馬鹿野郎を喰らつて、ガラツ八はキョトンとしました。叱られる意味が分らなかつたのです。

「その駕籠だよ」

「へエ——？」

「お前に跟^つけられてると知つて、仲間に喧嘩を吹っかけさせ、面喰らつて組打ちをしているうちに、通り過ぎた駕籠がクルリと向

き直つて引つ返して来たのさ」

「へエ——」

「駕籠はたぶん芝、田町辺まで行くはずだった。——その証拠には高輪まで行つた時分は、足許が怪しいほど暗くなっているのに、
提ちようちん灯も点けなかつたというんだらう」

「その通りですよ」

「お前を撒まくつもりで、一度停めた駕籠をグングン先へ伸のさせたんだ。——駕籠の中から小判や小粒や簪まで落されて知らずにいるはずもないし。あとを跟けるお前の顔は目立ちすぎるから、誰だつて岡つ引に狙われていると気が付くよ」

「へエ、そんなものですかね」

ガラツ八は長い顎なんがあごをブルンと撫なでるのでした。神田から日本橋へかけて、この顔を知らないものは江戸っ子のもぐりみたいなものです。

「最初に駕籠を停めた芝、田町の辻番のあたりが臭い。その辺へ着ける心算つもりだったんだろう。——そこで女の一番大事な懷中鏡を落して、その先は何にも落さなかったのは変じゃないか」

「そう言えばそうですね」

銭形平次の推理の的確らしさに圧倒されて、ガラツ八はただもう唸うなるばかりでした。

「何か容易ならぬ臭いがする。——仕事になるかならないか分らないが、駕籠から懷中鏡まで捨てるのはいじらしいじゃないか」

「どうしたら相手を突き止められるでしょう。親分」

「外に術てはない、駕籠を捜し出すんだ。駕籠か若い衆に何か変ったことがなかったか」

「そう言えば一つありましたよ。——駕籠は四つ手に違いないが、筋の通った立派な品で、垂れをおろして中はわからないが、後棒を担いだ若い者は、右の耳みみたぶがなかったようで——」

「それだけ分りやあと一と押しだ。日本橋か芝か、ともかく、飛脚屋と町役人に聴いて、耳朵のない駕籠屋を捜し出し、どこからどこへ、どんな人間を送ったか訊いて来るがいい」

「そんなことならわけはありません」

八五郎には初めて事件を手繰たぐる緒いとぐち口くちが分りました。

「耳朶のない駕籠屋を捜すのはわけはあるまいが、心付けがうんと出ているだろうから、口を割るのは容易じやあるまいよ。甘く見て失策^{しくじ}るな」

「大丈夫ですよ、親分」

八五郎は懷中の十手をトンと叩いて、一散に事件の真ん中に飛び込みます。

三

それから三日目。

「あ、驚いたの驚かねエの」

ガラツ八の八五郎は、まげぶし鬚節を先に立てて、転がるように飛び込んで来ました。

「何を驚くんだ。三日に一度くらいずつその調子で飛び込まれると、俺の方が参るぜ。お前と付き合っていると、つくづく寿命の毒だと思うよ」

うつらうつらと三尺の庭にもかげろう陽炎の舞う昼下がりでした。仮名草紙を出して、九郎判官義経かなんかにあこがれていると、いきなりこのちんにゆうしゃ闖入者です。

「全く寿命の毒ですぜ。だから武家は付き合いきれねエ。——大丈夫あつしの首はつな繋ながっているでしょうね。見て下さいよ、親分」
八五郎はピタピタと自分の首を叩きながら続けるのでした。

「——無礼者ツ、手討にする、そこへ直れツと来た。——面白い、見事に斬っておくんなさい。斬られて赤い血が出なかつたら、代は要らねエ。——かなんかで、沓脱くつぬぎの上へ尻まくを捲まると、いきなりピカリと来た。いや驚いたの驚かねエの、生垣いけがきを突き破つて逃げ出すと、芝から神田まで、街角を曲るたびに、月代さかやきと顎あごを押えて、一目散に飛んで来ましたよ。うっかりガン首が胴体から離れて、ポロリと落ちた日にや、焼継ぬきぎはきかねエ」

「馬鹿野郎ツ、何というあわてようだ。拔身ぬきみで脅おどかされて逃げ出して、懐ろの十手の手前済むと思うか」

「それがね、親分。相手が悪いんで。何しろ、千二百石の御旗本、佐野求馬様もとめ——」

「それがどうしたんだ。筋を通してみるがいい」

「こうなんで、親分」

——ガラッハの話は長いものでした。が、かいつまんで言うと、芝、田町四丁目の旗本佐野将しょうげん監けんというのが先年亡くなつて、

跡取りの求馬というのは二十八歳になるが、芝一円知らぬ者もな

い馬鹿殿様。將軍家への御目見おめみえも病氣と称して延々のびのびになつたま

ま、重役方に手蔓てづるをたぐつて、どうやらこうやら家督は仰せ付け

られました。あまりの低能振りに、武家方からは嫁のくれ手もありません。

五尺八寸のノツポで、顔は白うすのようにつかく、二十八歳で青あおぼな涙なみだを二本垂らそうという拔群いんがさ。それが何の因果か、行儀見習

に上がっているお腰元、お袖という娘に執心してどうしても嫁に欲しいと言ひ出したのです。

お袖は驚いて自分の家へ逃げ帰りました。これは日本橋通三丁目の上総屋かずさやという糸屋の一人娘で唄の文句にあるような綺麗さ。

佐野求馬は虚仮こけの一心で、死ぬの生きるのという騒ぎを起したのも無理のないことでした。

佐野家からは、あらゆる条件を提示し、人橋を架かけての掛合いが始まりました。上総屋の亭主吉兵衛は、娘のために必死になつて断りつづけましたが、佐野家は一人息子いとしさに、求馬の母親お育が、用人木原伝之助を督励して、あらゆる手段をつくしての談判です。

さいしよは約束の年季が明けないのに、夜逃げ同様屋敷を脱け出したのが怪けしからぬという言い掛りでしたが、近頃はお袖に預けた古筆こひつの茶掛け一軸じくと、彫ほり三島みしまの松の葉の香こう盒ごうが紛失したから、それを返すかお袖を引渡すかという強談ごうだんになりました。

あまり無法な掛合いに、上総屋吉兵衛自身で佐野家へ出向きましたが、これはそれつきり帰らず、五日経つても七日経つても消息のないところを見ると、用人木原伝之助に殺されたのかも知れません。

その上今から三日前の夕刻、父親のことを心配して本もと銀町しろがねの叔父のところまで相談に行った娘のお袖は、帰り途みち不思議な駕籠に乗せられて、どこともなくつれて行かれたという騒ぎです。

「あつしが跟けたのは、その娘——お袖を乗せた駕籠だったに違
いありません。耳みみたぶ朶たぶのない駕籠屋の又六という男を芝で捜し出
し、十手を見せて訊くと、あの日うんと駄賃をもらつて、日本橋
から娘を乗せ、芝、田町四丁目まで行く約束で飛ばすと、後を跟
ける者があるので、高輪まで延ばして田町四丁目まで引つ返した
に違いないと白状しました。駕籠を着けたのは佐野家の裏口、娘
は騙だまされて駕籠へ乗つたと知ると、初めのうちは少し騒いでいた
が、佐野家へ着くと観念したものか、萎しおしお々と歩いて裏口から入
つたそうですよ。——父親に逢わせるとか何とか言つたんでしょ
う。又六もそんなことを言っていました」

ガラツ八は一気に弁じました。

「それで驚いて飛んで来たのか」

と平次。

「そんなことに驚きやしません。弁天様の申し子のような娘を、二十八の二本棒にやっちゃ、あんまりもつたないから、あつしが上総屋の内儀に会つて、いろいろ相談をした上——娘のお袖には許いいなずけ嫁の約束があり、近いうちに祝言させることになつてゐるから、嫁に上げるわけには参りませんと掛合つた」

「フーム」

「その掛合いに行つたのは、あつしと上総屋の番頭の庄七という親爺おやじで、この男は勘定のことしか分らないから、まアあつし一人で談判をしたようなものですよ」

「それでどうした」

「芝、田町の佐野の屋敷へ行つて、上総屋の娘を返して貰いたいと言つたが、用人の木原伝之助というのが大変な野郎で、——お袖は実家に逃げ帰つたきりここへは一度も来ない。夢でも見たか、出直せという挨拶だ」

「フーム」

「あんまり癪しやくにさわるから、あつしは小判と四文銭と、櫛くしと簪かんざしと懷ろ鏡を縁側に並べ、お袖を乗せた駕籠はこの屋敷へ入つたに違いないと言ひ張つた。——もつとも証拠はみんな親分の智恵の受売りだがそれでも味噌みそすり播用人をギューツと参らせたことは確かで」

「フーム」

平次もだいぶおもしろくなつた様子です。

「すると、それならそれでいいとして、お袖の聲はどこの何という者だ。^{こしら}拵えごとはならぬぞ。——それを聴こうと詰寄られた」

「面白いな」

「少しも面白くはありません。番頭の庄七は因^{いんごう}業なことに商売のことしか掛引を知らねエ。——さア、何とか、返答せいツ——と脇差をひねくられると、青くなつて一句も出ない。仕方がないから、あつしが引受けて一世一代の大嘘を吐いたね、親分」

「嘘は晦日^{みそか}が来るたびに吐いてるじゃないか。一世一代もないものだ」

「茶にしちやいけませんよ。ね、親分——何と言つたと思います。

あつしはいきなり襟を直して、こう正面をきつたね。――はばか憚りな

がら、上総屋お袖の髻というのは、この八五郎でござんす――と」

「馬鹿野郎ッ」

「それね、親分だつて驚くくらいだもの、向うはもつと驚いた。

しばらくあつしの顔をまじまじと見ていたが、通三丁目の小町娘の髻らしくないと気が付いたか、無礼者ッ、嘘を申すと手討にするぞと来た。こうなると意地だ、あつしはいきなり尻を捲つて――

――

「分つたよ。くつぬぎ沓脱に坐つたまではいいが、ピカリと来ると、生

けがき垣を突き破つて逃げ出したんだろう。仕様のない野郎だ」

「だって、相手は千二百石の旗本じゃ、十手を出したつて驚きや

しません。こうなりや逃げるが勝ちで」
八五郎の話は際限もなく飛躍します。

四

錢形平次は、それから三日ばかり、あらゆる方面に手を廻して調べ抜きました。

上総屋の内儀お篠^{しの}は、夫の行方不明^{ゆくえふめい}に次いで、たった一人娘のお袖^{ゆかい}の誘拐^{ゆうかい}で、半病人のようになっており、何を訊いても埒^{うち}があきませんが、そのうちから、上総屋吉兵衛はよほどの決心で佐野の屋敷に行ったらしく、手筐^{てばこ}の中には万一の場合のために、遺

書が用意されてあつたということが分りました。

その遺書はかなり突っ込んだもので、自分が帰らなかつたら、佐野の屋敷で殺されたものと思えとも書いてあり、一人娘のために命を捨てる氣になつた、父親の突き詰めた愛情が滲み出します。^{にじ}町方からの添え状で龍の口へ行つた平次は、そこで佐野家の家督相続に、いろいろ手続きの上に不備があり、洗い立てるとずいぶん問題になりそうなのを確かめると、いよいよ佐野家を相手に、一と芝居を打つてみる氣になりました。

「八」

「ヘエー」

平次の改まつた顔を見ると、ガラツ八も膝ひざつ小僧を揃えないわ

けには行きません。

「お袖を助けるのは、少しばかり骨が折れるが、やってみるか」
 「やりますよ、親分。どんなに骨が折れたって、あんなピカピカする娘を捨てられるものですか。嘘でも一度はあつしの許嫁になった娘だ」

「相手が悪いから、一つ間違えると、命がけの仕事になるかも知れないよ」

「命がけ——へッ、親分の前だが、あつしはいつ命に糸目をつけました。はばか憚りながら——」

「まあいい、今度はピカリと来ても、逃げ出さないようにしてくれ」

「あれは、不意だから驚いたんで、覚悟さえ決めてかかれれば、味み増そ播すり用人なんかおどに脅かされるものですか」

「その気でやってくれ。うっかりするとお袖の命も危ない。唄にまで歌われた通三丁目の糸屋の娘だ。二十八の馬鹿殿様と一緒にされるくらいなら、死ぬ気になるかも知れない」

「なるほどね」

「今までも、あの佐野という屋敷で、腰元が二三人死んでいる。馬鹿殿様の玩具おもちゃにさせるにしては、人間の命はもつたいたい」

「行きましょう、親分」

八五郎の血は沸ふつ々と高鳴ります。

話はこれで纏まとまりました。

その晩、錢形平次は駕籠を吊らせて、芝、田町四丁目の佐野家の裏門に乗込んだのです。

「頼む」

「誰じゃ」

「町方の御用を承る、神田の平次と申すものでございます。御用人木原様が御入用の品を持って参りました。御取次を願います」

「しばらく待つように」

門番が顔を引っ込めました。それからざっと四半刻しはんとき（三十分）ばかり、いいかげんしびれのきれた頃くぐ潜り門もんをギーと開けて、

「庭先へ通らっしゃい」

門番は恐ろしく権柄けんぺいずくに案内します。千二百石取りの屋敷

というにしては場所柄決して広くはありませんが、庭にはもう桜が咲いて、夢見るような朧おぼろづき月が照らしている風情でした。

五

「町方の者に用事はないはずだが、いったい何を持って来たと申すのだ」

縁側に出たのは用人木原伝之助、四十五六の存分に強したたかな感じの男が、庭から廻された平次と八五郎を見下ろしました。

「御用人様は、この男を手討にするとおっしゃったそうで、改めて私がつれて参りました。どうぞ御存分になすって下さい」

「何と言う」

「八、覺悟はいいな」

「へエ、この通りで——」

バラリと肌を脱ぐと、いつの間に用意したか、一尺五寸ばかりのおおのしの大熨斗を、肌守りの紐ひもに括くくつて背中に斜めに背負っている惡いたず戲らっ氣の八五郎です。

「こんなあわてた野郎でございます。八五郎といつてあつしの子分で。へエ、これでもお上の十手捕縄を預かっておりますから、御成敗になれば届け出なきやなりません。ちよいと一筆、こうこいういわけで斬つたと、お認めしたたを願います。もつとも龍の口の目付衆まで御当家から御届け下されば、町奉行所の方はあつしが口

で申してもことが済みます。何と申しても、吹けば飛ぶような野郎でございますから」

平次は吃きつと見上げました。

「平次とやら、お前は、当屋敷をゆすりに来たのか」

木原伝之助はしずかに押えました。

「とんでもない。——あつしはこの野郎を差し上げて、改めて上か総屋ずさやの娘お袖を頂戴して参ります。上総屋の内儀から、書面を貰つて参りました」

「ならぬと申したら」

と木原伝之助。

「そんなことをおつしやるはずはございません。——上総屋の娘

は上総屋の娘で、御武家方へ行儀見習奉公に上がったもので年季も前借もあるわけはございません。古筆こひつの軸物じくものとか、三島の香こ盒うごうとかは、いずれ屑屋くずやか何かで搜してお返しいたします。へエ

――

「だ、黙れッ、無礼者ッ」

木原伝之助は一喝いつかつしました。

「おどかしちやいけません。上総屋の聲になつて首を斬られたり、公儀御書上げも何にもない、――本当にあつたやらなかつたやら分らない品物がなくなつたなどと因縁いんねんをつけられて、娘を誘かどわ拐かされちや町人がかないません」

「えッ、黙らないか。ここを何と心得る」

「地獄の一丁目でしょうな」

「おの
汝れッ」

抜いた一刀、ピカリと来ても平次は驚く様子もありません。

「もう一つ、上総屋吉兵衛の死骸を頂いて参りましょうか」

「な、何と言う」

「娘を無事に戻したさに参った吉兵衛、それを縛り首にした不仁だけでもお前さん腹を二三十切つても追つ付くまいぜ。吉兵衛は家を出るとき立派な書置きを書いている。そればかりではない。

この屋敷のお長屋で殺されかけた吉兵衛が、消炭けしずみで書いた手紙を外へ抛ほうつたとは気が付くまい。吉兵衛が殺されても、精いつぱいの仕事をして行つたお蔭、——はばか——憚りながら、あつしの上役の笹

野様という物のわかったお方が、吉兵衛の書いた二本の遺書を持って、大目付の御役宅に行つておられる。今晚中に娘のお袖と、この平次が無事で帰らなきや、明日は龍の口で佐野家取潰しの願いが取上げられるんだぜ。おい御用人、どうしてくれるんだ。消炭の書置きは、吉兵衛が殺される晩、表門お長屋の左三つ目の窓から抛つたのさ。どうだ驚いたろう」

「……………」

「嫁が欲しきや、尋常に手順を履むがいい。千二百石の殿様が、町娘を手籠めに^てにして済むと思うか。今までにもその術で^て三人も腰元が死んでいるじゃないか」

「……………」

「その上、御当主は病氣と言つて、將軍家御目見も延ばしてある
そうだが、將軍様が一と目、佐野の殿様を御覧になつたら、どん
なことになると思う。——瘋癲ふうてんは家督になるかならないか。——
——どんな手蔓てづるをたぐつて家督を継いでも、こいつが知れるといつ
ぺんにお取潰しだ。——吉兵衛の遺書と一緒に、その仔細しさいを大目
付衆まで、夜の明けないうちに届け出る手筈てはずができているんだぜ。
どうだ御用人。いやさ、木原さん」

平次はヒタヒタと嵩かさにかかりました。火のような熱弁です。

「恐れ入った、平次殿」

木原伝之助は虚勢を失つて、畳の上に崩折くずおれると、次の瞬間、
一刀を引抜いて、ガバと腹に突つ立てたのです。

「あ、待った」

驚く、平次、ガラツ八。

「いや、いちいち^{もつと}尤も。——みんなこの木原伝之助の至らぬから

だ。お袖は帰して進ぜる。がその代り——この経緯^{いきさつ}はみんな内聞に願いたい。佐野家のために」

木原伝之助は紅に染^{あけ}んだ手を挙げて片手拝みに拝むのです。一番無情で、この上もない強^{したた}かな顔をした木原伝之助は、この上もない忠義者と知って、平次もしばらくは二の句が継げません。

「三百年も伝わる家柄、御祖先の武名を護^{まも}るためには、よい世継ぎを得る他はない。——武家方からよい嫁を迎える道のなくなつた上は、町家から優^{すぐ}れた娘を入れるのが、——この木原伝之助の

忠義、——佐野家を興おこす唯一の道であつた。——吉兵衛を手てに掛けたのは、ほんの行き掛りからだ、もとはやはりこの木原伝之助が至らぬからだ」

「……………」

「若殿御身の上ばかり案じて亡くなられた先殿様や、この上はただよい嫁女ほしさに、老いの身を忘れて苦勞遊ばす後室様の御安心のために、この木原伝之助は三人まで美しい腰元を犠いけにえ牲にし、その上、上総屋吉兵衛を手てにかけた不仁この上もない仕打ちが、酬むくいがなくて済もうか。——死ぬ身は少しも惜しまぬが、そのため佐野家に万一のことがあつては、御先祖様にも相済まない。平次殿」

手負いは苦しい息の下から衷情を訴えて、ひたむきに平次を拝むのです。そればかりではありません。縁側の障子の隙間からは、泣き濡れた白髪頭の老女が頼み少ない姿で拝んでいるのが、平次の眼にまざまざと映るのです。

＊

お袖を駕籠に乘せて帰る平次。この時ほど萎しおれているのを、ガラツ八はまだ見たこともありません。そつと袂たもとを引いて、

「親分」

慰め顔に差しのぞく八五郎に、

「俺はとんでもないことをしてしまったよ。あんな忠義な用人を、殺さずに済ます工夫もあつたろうに——」

平次は駕籠の方を憚りながら言うのでした。

「でも仕方がないじゃありませんか」

「向うでも仕方がなかったのさ。由緒ゆいしよのある主人の家を立てて

行かために。——母親にしては自分のたった一人の倅せがれに人間らし

い生活をさせて、夫の家を絶やさないために——」

「でも、そいつは間違いでしよう。そのために人まで殺しちゃ、

——ところで親分。吉兵衛の消炭けしずみで書いた遺書が、本当にお長

屋の格子こうしの外に落ちてたんですか」

「嘘だよ。——吉兵衛はあの屋敷の中で殺されたに決っているが、

——母屋おもやで殺すはずはないから、たぶん用人の長屋につれ込まれたに違いあるまいと見込みを立てたのさ。——殺される前に少しくらいの隙があれば、消炭の遺書くらいは格子から抛るだろうじやないか、——そこまで見当をつけて言うと、木原伝之助はギョツとしたらしいよ」

「へエ——」

ガラツ八も呆あきれました。

日頃の平次でない詭トリック計です。

「だが八。お前はまさか、本当にお袖の聲になる気じやあるまいね。あれは少し綺麗すぎるから用心するがいいぜ」

そう言つて五六間先へ行く駕籠を、顎で指した平次は初めて固

い頬をほころばせるのでした。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（十四）雛の別れ」嶋中文庫、嶋中書店
2005（平成17）年8月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物全集第四十二卷 醜女解脱」同光社
1955（昭和30）年3月5日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1942（昭和17）年3月号

※副題は底本では、「駕籠《かご》の行方」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2015年12月13日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

駕籠の行方

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>